



山集
四

5
1979
4

山集



1979
4

崑山集卷三之下目錄



梅
白梅花

海棠

去草

歸馬

三



梅
梅翹
付目
日介

梨花

辛夷

山吹

蕙

二

鹿山集卷第四

春部

櫛

けふ人のふくむひつきた櫛
さうくのうなりむかき
うらむらういさみゆんたさう

日

西落の懸とあふぬやたさう
新まはれぬさうーのあそ櫛

傍くおきし七重の藤と八重梅
昔賢家のいふかゝ永日の縁
水野めく二百駒き新地
母借されせれ
二百駒の花や合く八重さく
漬せ人あしとれちや焼梅

深能沼舟

花のちり後まよもやと梅川
舟め入とあを花火の系梅
柳もやうとまうひのいとさく
舟をたれも腹と仔梅梅
りけくとけもも火梅の花乃
久もあふもまを死てわさ梅
舟をあふも人やふ心家さく
虎乃尾の花舟遊はけいぬ梅
舟袋はあふもあふいとさく

咲花を老の果報を嬉さう
 山姫のまこく物のかさう
 掃地も木法や蛛の家さう
 火桶も理とありて咲は生か
 花はあや解く後まゝ糸桶
 道さういかりても多き糸桶
 糸宮のよき花じけや仔桶
 花の口をわく物とりさう
 糸を杖花いあうのを嬉さう
 善賢象の法もあさうか大桶
 焼桶花乃さうやゆきおんか
 心かそわちふと思ふ糸さう
 鼻か似く盛かゝり後善賢
 名か小おら物さうせよ仔桶
 さう人さう枝や富さう家さう
 善法かさけ徳谷のさうむ

花の影をいりや右野の橋を
 かく横舟りりさくみよ系橋
 かわわや鹿をしとてぬ系橋
 いよあけは乳のこ子もこい
 こをいふ落花指藉さうり
 大橋を炙るく縁しちりけ
 大橋をくわやうりく懐され

花如蝶の舞を非葉に係
 系柳急川一橋のけけ外
 目の出ぬをまここ思れらわの大橋
 年くお花とやうりり焼さう
 風ゆりよまそそみ家急川橋が
 風の非とま川ぬ人か係橋
 けしうひや花の影をせり橋
 自かけそ山のひこむ此大橋

花の敷板や前貴人此系さう
 小橋のともわの葉やらりののり
 酒らもせんー奈くみさる橋
 逢く候をいかに逢たの候さう
 毛と吹や虎の尾と敷花は
 大橋をせといはると都々毛うか
 田定の門舟楳ともいぬさう
 虎の尾やちりまを袖まはら
 いりやうをわあまといふは
 お前を人ふれ若もつまさう
 楊貴妃の花を所摺ら前か
 三妻の故やわらうく逢さう
 橋戸の穿候るしや花さう
 おんと本母やうくの系橋
 大風かきそちりむち山橋
 花守と石脚とわいせんは橋

桐根と指添らるわ花うけ
まのこせみさうの忠州一橋水

遊書

芝ふ敷のむん橋と子何子
板らん舟なりとも用く橋水
詩中歌よ讀つこ題のさうが
らん子置けらるを流のま橋
うとらんこうやうくわや焼橋

桐田や佐保姫こそゆきん
おまら源山橋やらんらん
風さくは縁公事ゆきん九家
塩電の花とのそくは近目外
咲ぬまこといあまふ家橋
春風の香ふは木やきり八
舟舟敷花をあげらる家さう
廻つてくらねらお焼さうら

枝朽く坊まふかきとあ児橋
大溪の松といとれる俣掛橋
さふ志くぬ木焼つるゆきも橋を
あゆまふ風を継母の児さう
懐紙ゆきを名跡の花や逢橋
花盛道江口の君や善賢家
果たるる人の風とあく大橋
秋も晴るんさうさの花も
物も慈恵内外母たるいせ
大風のうもや古さ家さう
こゝへ家さねくや野く逢
八重小咲花や蝶さ此系橋
あふりるる人あをさせを逢
逢橋ゆき一の花見ん外
小橋のちりうく氷あわの氷
南指や老く二度思さう

夕なみも花をまきくり焼橋
 雲と花と雨ふらえん橋
 垣電の前や火たきの焼橋
 切らぬく焼橋うみさし橋
 目やとりは鏡を柳さくす
 蝶々の帯宿るれやあさ
 らくさいの種くち橋をき橋
 焼橋花を百とせもはか髪

春風ふさしく橋をき橋
 夕なみも大原巻の系橋
 吹ら枝を風折るゆ橋か
 花と風をこさるるり八
 わら蝶の目は如腦の火さく
 家と花の匂いもやく香橋
 花の露は針糸は鈴の伊橋
 西りの花をこさるる今橋

風ふたふと舞ふ垣のむらさき
なみのいささらよ表紙の糸梅
らそそみよ花めくらとるさき
枝られぬ人も畜生大さき
咲花やせん一斗梅をほくら
花のちれうのあや小町焼梅
花そそる腰の二重は焼くら
志すのめ付や下結の糸さくら
日本の花はあまのいさ梅
春風や吹くら花のこころ

中国寺へ糸梅のめくら

誰もわうとくらあ蓮の糸梅
散はくともおらうともあそひ梅
火梅や好む本はまのまうい歌
目ん梅やうめや文珠ふけん梅
東山これ御物のほくら花

藤原のよとらんかねや吉野の
 塩竈の味とあふさとい満千外
 飛鳥もあへて伊勢い極うか
 楊貴妃乃花小胡蝶やうわの
 楊貴妃の玉はあけうも花の雲曲
 向きの楊貴妃や花の家さう
 花の後の本男さねや回ん極

甲り来るも青うら雲へ回ん極
 本はうらへ八方うらえ八ま極
 八条も是あはいうそつ重極
 乃小あふ人もあへて甲と極
 妻の花とつひてとさうぬえ極
 在やむ判友元つとま此風
 極田の儒都五吉野法師外
 房りあや約へあへ川の山極

三つとくふる佛お経の善賢家
 かく隠れんもたなるや浮野橋
 大橋の春へ下子叫らうか
 花お方と推さる深の橋水
 咲むやしん木佛の善賢家
 是れのおくおきやまきさう
 花車牛のむけらやまき橋
 舟を推ぬれれ初敷此山橋

定之

後藤田原附
さきうき

山橋のまきて咲も一まう那
 吹ちた風や飛濤の山さう
 花いりし寅卯を田此橋をか
 橋も軍や花のひち法か
 のつかけと若野此橋やみり地
 花の波を拍おれなう川
 橋ちる隠て流るやゆさか
 吹風のまよふたかまう花

定房

まき
木直

大坊井上
正知

坂倉
正辰

奥の尾崎
正盛

大坂
英彦

大町富永治
英彦

あつて橋かきそりたるき次木
花や今も中納言さうり町
友谷 貞好

橋の西西北花と

むききみと花や橋の西西北
美昌

皆冠橋の町

さうりちくらくを橋の花けん
若治

橋田

花守の裏橋田北のくーい
良徳

橋田八郎ん羅ふのや子万所
宣安

橋田と梅田や花のよせ切て
美奈

田原うそふらと北町

まじ地のるき橋田やわさたう
伊守

橋田の吉野法印の寺領外
人勇

八重橋

系引をふとやうの地をつま橋
貞好

小八郎う此花車をわつまう
廣寧

素良物のおころきりやの
 八海とこれ花軍のまこり
 九まふ白人おるのつまゆ
 つま橋二まこり四季おゆも
 八重橋火よりせをさ東大寺
 つまこりた友友庭や素良曝
 八重橋刀り足もまや八文字

西の橋

年とくく又えんあめ橋か
 水面やまこりあめさるこれ

家の橋

あめ橋や親りゆり家橋
 徳谷ふこ八増遊家さるこ
 八橋を枝よりこり家さる
 風ゆりこをさるこ家さる
 花軍さるあやう馬の家さる

右在岸 妙欠

江守位 林麻

右在岸 安道

右在岸 正奉

友室

正朝

由南

保友

同

右在岸

正知

晴位

貞剛

右在岸

好道

かりんくろりや後友の家極
そくもりをむくはくろり家極
富つ日本いりやかりきり家極
家極すかきやせけいぬ極
和弁とよあ極とたけ家極
目か入やわけくはくろり家極
姥や子や女と三河の家極
花の極をれ三東といふさく

三河

宗時

後河内守

正次

中務

貞宣

備前守

俊成

香公水谷

長昌

利政

光寛

母色

私政

光寛

熊谷極

熊谷いもやくさくはくろり
熊谷のかろりふいりく花の色
らまの人の花やを奉はるる極
熊谷は花や源氏のもさく色

熊谷

正勝

五郎

一明

平松

良次

桃山

保友

塩竈極

花の親身塩竈のさくはくろり
よあふの塩竈や咲さくはくろり

鹽竈

勝吉

貞祇

貞祇

三つりつ橋

散花をよりの結乃三つりつ
枝を結乃三つりつ八橋の流
流のよらん花のら此本三つり
あつ川や風凰の橋三つりつ八
花畑ん三つりつ八の橋と

楊貴妃橋

花をよらん花のら此本三つり
楊貴妃の三つりつや花の雪女

虎尾橋

美女をよらん花のら此
名をよらん花のら此
結やたつりつ虎の尾此橋也

姥橋

姥母や付くつりつや姥三つり
唯のよらん花のら此本三つり

充寛

如貞

之賢

清之

政次

如之

友我

如貞

宜深

初之

道長

盛福

さくや姫今ひくやるら姥さう

信田

政信

小蝶也わちまか吸さううを極

江守

一滴

花ぬきささくわね足姥さう

松山

康耳

氣力るまき柳らちいろうをさう

保友

厨子小治さくや小町の姥さう

江戸守

一心

長いさくや船也吸わさうを極

一系

長下

姥さうさあめ花也百年め

友我

姥極ふはくや船也の少次さ

安明

姥さうさふさうさえじや花は教

因香

正次

子ねらんさうさくやいさの姥極

在

山貞

花吸く氣は十八やうをさう

善公

一敬

さけさうの白姥さうさあはら

白方

信次

年さうさ朽本をたわらわ姥極

伊波

勝吉

枝を百さういっくを姥さう

石坂

勝吉

出ん吸はさく見せなり姥さう

森

酒永

火とさく次花を火極さうを極

友

在時

花袋散珠ふくろもや姥さ
物影や鞆あし挿ふもさ
冠母をけくもかきなり姥
一あもにあもさるも姥極
火とるもと花や黄の姥さ
友とらり老の愛もささ
是綿もら姥さるも花のゆさ
花の小鳥花入孫の姥さ
三輪の山も花極さるも姥極

系極

實極とて川のらとさ系極
系極ちるぬ極も花極さ
花散と小鳥わかけも系極
かると海枝や山ふの系極
咄風やめあめさく此系極
ねや姥の二かん針の系さ

新

玄樵

中

宗直

右

宗直

左

福近

福

清之

之

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

宗

宗直

唯とまての髪色あふくそ系極
手引もわくくこせんの系

梳極

みまふもころわ小神のい極
喉もあふれせんさけり極
天下一といふ極

仔極極

少坊極國帝盤の色も外

仔極極花付りや鈴麻山
悪風を神風とるれ少坊極
奥山と内宮を造り仔極極
花の弁や花うり系仔極極
三也川も花の流りやせきり
秋宮の花れとくくやいせ極
花荷ハ折の部や仔極極
軍せよと飛升行畏仔極極

田

田

相

し元子
徳和之虫
ら極

利政

貞好

正奥

位田

政信

龜

胎衣

定直

康耳

重定

元信

祐政

種宗

仔辨極あてわじり物より

月

花の形もあつてをわらのせ極

道保

淡藤山やうりまけをまのせ極

一井

うらゆきく霧や霧戸仔辨

之忠

花のわたり風園とわよのせ極

金成

花の波を清洗うやのせ極

如貞

名男極うら花のいせ極

貞祇

四日ある物の花うら仔辨極

不存

仔辨極あて寸とあけのいせ

重貞

家と咲花の津ての仔辨

英女

花とみく切まねと徳やのせ極

後成

咲あは花を神妙のせ極

定房

左そよや大和姫松仔辨極

右 左時

いせ極花よりん屋まよりめ

元春

花の上花を仔辨極あ似極

利正

世世をりや馬よりみり世

新室の姪母侍野橋

けりや

り野橋花の池るや御新室

みきや病を氣もりりり

九重ふ咲やそりり此侍野橋

火とそ色次花や神系の花橋

中目り坡岸橋の花さり

田村堂や少る酒と心

見橋

わき風おわくしそそお向橋

いせんそく籠りわお向橋

無名そらんで落お向橋

おとそらと蝶や花と見橋

見事さや一見橋二さん

花を根おお置るら見橋

存任 可彦

信元

幸以 正次 御一老母

定重 正貞

雅示

無凡

友谷

貞利

松

種栄

松

一治

冬田流系

友勝

守和

地とましくやせらるるゆゑなり
山白きちりや初のちりこさく
花やゆめちりく舞しゆ橋
むらさきか老子といふん見橋
判友のくくゆそこの見さく
花の鳥もまきとありとほ見橋
なせふあさくくくくく見
見ん橋ちり木入道やうま山

花本在国
宗ま

出ま
内悦

博位
上橋

博分
後次

江戸
観重

江戸
中包

森
正次

石見
住英

大坂
安明

池田
身

池田
身

黒深橋

白むらさきか
黒方のかゆら黒深のさく
黒深の花とぬんを道心
花と散らるる黒深のさく
かすく黒深の橋へ天り花乃雲

橋
保友

橋
正忠

坂
由南

坂
定吉

平
良次

平
良次

火橋

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

鳥帽子橋

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

火橋の類々といふらんむは

信安

宗洋

良保

長盛

清之

直紀

中包

山井

公新

清成

正知

清成

忠直

源長

ふりさう

くまの山にうらみさうさうさう

花の蜂のちいさくはうさうさう

遊ばせりちいさくはうさう

普賢象

ちえさうの文珠とていん普賢

麩の毛の月あや普賢

般若の鏡の具をけり普賢

柳の葉のさうさうさう普賢

茶の餅の舟のさうさう普賢

咲の枝の普賢象がうらさ

花のうら大将の珠普賢象

さうの佛のさうさう普賢象

普賢象の極や鏡像の極本境

普賢象とたう一井を本極

極田やさうんみたりやと普賢象

後徳友

栄甫

中流

貞宣

普賢水名

長昌

過

正朝

夜

如貞

月

權口

正心

夜

道心

夜

如貞

夜

玄可

南を名

月

池田

長昌

夜

月

夜

文新

花より長あう門を普賢象
咲かんとくあんや佛普賢象

定房

元五

大橋

火をそとさの瓶をいもんたさ

普賢象

定房

とかのよくい狩人やなれ大橋

富田

良保

大木の唐大なるまや大さう

斤相

三保

風のまや大橋まて生をあり

紀別

三保

ま流くなまや陸橋う大さう

河内

三保

枝と切を殺生か〜大さう

宗法

花咲へらびむ入よいぬさう

一懸

さけといのまかぬらまはさう

宗貞

おらわ我門ていれえよ大さう

宗辰

桃の花か咲子たけいぬ橋

後次

初夜の鐘か余れ花ちるや大橋

由阿

橋と木をいそのけん大さう

種政

大橋

明年の初花をくくまはら

奔うる兵

う心しめやゆきそ吉野のまほ

宗田

花のやふもわわいあんなまほ

皇明

目がしり寐入花をくまはら

英勝

かられぬら双六もんやまはら

友三

奥山や嘉例色川まはら

廣寧

花軍の敵うやゆふまはら

伊誰

花の良れをうあくあしまはら

頼永

ととりまあそ紫の花やまはら

政原

もやくさけお代まんのまはら

中好

そそもたふの柳をゆきまはら

月

花の波をうらむとまはら

夕霧

花をくまはらたふれとまはら

し元子

咲を散とゆきまはら

ま吉

花さうハ半ふ鞍とけまはら

正重

四方山の橋ゆりやまはら

長頼丸

咲かぬらまは橋やまづり花 月

橋本此をわけおくれ若野水

きららりやまらりと橋ぬまは庭

軍せむ橋の花や地まくらと

見ゆるやちまめハムふ橋くらと

六条の雪が橋みくらや篠原

車登り馬そのわといさくら

かんごんの夢かそよの山さくら

みかかちりくを本此橋水

寺法師いりみかかん山さくら

糸の花とあこりふこ山さくら

糸橋

道東屋の花此筋はげ糸橋

かえ橋母花とらまけを糸橋

風袋くららとらとくさけ糸さくら

せんくらりみちまや子中此糸橋

将野の屏風乃橋とみく

うき世やのこけ人の縁

徳右橋

意心う散徳右のたれさうり

人も大りかき花を家橋うり

家橋

公家武家もひく山吹や家

地下土もをり井とるもや家橋

嘆けく世あをせんさいの家橋

風もや前舟あう三の家さうり

嘆とるも知や平人の家橋

振舞の志けさや蝶乃家橋

海繪師の意此橋志南

繪も写せよさきま箱の家橋

まひさうを指らしてみよ家橋

花の散ぬ座うこりもや家さうり

五

火橋を三つとて流るるを三つ殿
東風之けりともあめさるる

目人橋

心さの事乃おそいの事この目人橋
かゝ家数長縮るれや目人橋
橋下流の流や念ふちこ橋
つまづりなるい事んがの目人橋
瞻あや目人わさる奇此目人橋

目人橋付より鈴や心を守り
多くと長ふ鈴も小橋おとす成
人ありんこあ〜目人橋
ちくくみよ葉う流るもさる目人
学文も目人橋もやすし坊主

姥橋

三途川越くも目人姥橋
三途川越くも目人姥橋

うのふらふら氣や関寺は姥橋
佐保姫のされの果るや姥橋
花にさふら木もろと姥さる
出家流落まれ寺の姥さる
老の娘戀とまみま〜姥はる
葛城の若子やや段乃うを橋
まわ男持やさうゆは姥さる
橋ゆへ〜ふと〜せ〜さき元は
山は中る〜ぬとじ〜とさる油
墨深の橋ハ花の美人傳うか

善賢の家

白雲小法師の花は善賢家
かきとらとた〜とみゆりや善賢家

仔細橋

海老鴨小成くわあ〜仔細
野の定舟さるな舟文仔細

能のわさ所の息好し

わさふ又別乃花有し是橋
能のわさ所の息好し

橋翹 付 貝 日記

花より色実さうか引し橋翹
莫色木此知らたけし橋翹

塙より

橋翹をゆなふせん志かひ

釣舟ふりけくみよし橋翹

橋翹を浦の管座此花刀亦

難を渡本舟候のなき橋翹

橋翹とあつゝ思ひと切しき亦

魚舟花やりりさけさうさひ

釣舟ふり橋やそのまう急橋

霜ゆりや朝日いとけぬ橋翹

恙とともやとともやとともや

大

酒をくちや巖の海にさくつ翹
山を花海そ実生のほくつ翹
さう翹や花翹とるる翹
山海の珠抱るれやさくつこい
ゆきいよの神木ありや翹
橋翹入く録らんりし野新
傍岸を花や海中ありや翹
こゆをさきやきへ抱りいさくつ翹

煮てのこやんあつらん橋翹
ゆきわを花見ととるる橋翹
橋翹や四母さくみの作下屯
焼くさくまやとみ深の橋翹
青柳の系ありく釣つさくつ翹
八重此地海をくみえよと橋
翹文の初志花やさくつた
雨母たさきやゆきや橋翹

政念

政辰

定之

未得

日

政信

保友

隠人

橋廻魚鱗母のきこれ軍

糸より柳の浦のきこれ

目いせくともかこもるや橋

登んもふくや志り橋廻

ん流さの柳すか栢やきこ

花さうるこ枝いりもや橋廻

水底のじきれ本母花や橋廻

その中めこそ味り橋廻

素良酒のさうるわのきこれ橋廻

むとうけをさうるこさうる橋廻

しまさうやまわう一ひの橋

吾野川のきこれ

吾野川母のあやうと英橋英

橋廻とあきの酒はさうか

骨さのちのみり一野の橋廻

あひと心はきこれ英ふや橋廻

新野之島

直政

浪云

安明

同

修森

久事

林原

池田

角

法可

江守

直成

五

石田

石野

橋廻

信公

中務

貞宣

中村

重則

長政

同

大東へもふやどかしのさうく
花ゆらりふかたねをよき梅網
ふれ民の中乃所花や梅葉

梅貝付海草

みま花や目紫入のさうく貝
蛤のさうらふかたねやさうく貝
い東の鼓之拍やはらうく貝
梅貝をよのひらうくさうく貝

信
政信
由富
直知

ゆらりか波とよ梅を梅の
花やそちおさうら梅を梅の
徳右の花を得る梅のり
かくれま人のさうら梅のり

白鳥花

花のけの水をさるれ白鳥花
英田ゆくさうらさうら白鳥
神地や風舟おしぬさうら

梅盛
信次

梨花

さくあけのありはさきほ咲梨花

うらみ縞やあはれの花のまては梨花花

氣晴ても風あんならうも梨花花

水やうの花の波を夕あけ

あけをわいぬ川梨花のまては

咲ちるはあはれ定梨花のまては

うらみ目あわらうさきる梨花花

似て物やうさきるのまては

長歌のうらみ天氷と云花

道の道はまをさうゆらさ

まうあけうさきのあはれ

天氷の文字やうさきる花

海棠

うらみうらみさうさきる梨花

海棠のまてはうらみさきる

花

友室

斤相

良保

徳生

まのま

花

保友

江戸

安室

酒石

良徳

行らざるもいふこといふ事花は
 海棠や咲くちりまて一絲ふ
 いかうと眠花もさう小蝶か
 虎をむ海棠一のちれのか
 花の落ちかいたうくやる眠
 海棠や九旬のまど一眠つ
 漁翁も咲や名もささめい
 田睡るや海棠柳てふかさか

未如
 改信
 玄樞
 奈糸
 長歌丸

人の目をさしり海棠の眠
 海棠のほかまや花の王子達

同

辛夷

ひとまきらあうー花の盛
 ともきぬ順のうー花は赤
 花といひまへ辛夷花の
 ちまきら花を起あうま
 ひとみまわうー花のち手ぬ

揚列歌

之句

大なるあらしの花のこころ

春草のうらみ
定思

梅舟こころの咲かざらん

梅舟やあらしの花乃きこせ抱

夕霧

花舟やあらしのほろほろと

長流

春草

あんなかしのあし抱くふの舌つ

うんりのこころやこころと評胡蝶

こころほやあらしをまゐのより

あんなあし下を地こころ鬼あし

中よれあしのあしとあしよめあし

花を木に抱くふりてや梅舟

上蘭舟はこころとすらすらと

あしを梅舟のあし抱くふりて

道風舟とあしとあしとあし

野原とあしとあしとあしとあし

あんなあしとあしとあしとあし

てゝいへん野原お出〜〜〜
 ちや此為焼のちりりちりちり
 けら〜おらお孫つ〜まへ嫁
 名草い〜いさ袖とるらやけ燈
 た〜こ〜や音ととと〜此烟
 水落の針とて縫ふや波の文
 あれおまはじ〜二女の松葉お

佛の座とらんを御子や落の

目と出とをか板の下に鬼おさ

汁の子女あ〜おら素や嫁お
 姉れ〜い草うやよゆんり〜け
 南の〜い〜えんや野の〜靴
 様〜人送ら〜り〜ハ餅お
 野原〜わ〜じ母の〜あ〜お〜
 け〜じん〜そ〜置〜ら〜り〜ま〜ら〜嫁〜お
 う〜ら〜お〜ふ〜け〜お〜を〜嫁〜お

薄生くわきつゝ霜もや嫁の森
 わゆるわく鬼味當と城筋外
 とけゆふ事花と露の玉藻
 と自ら山小摘しそや志の嫁
 けく雪の海野おつらや雪書
 結ゆくせみそわしらんの花威
 えんやと透まそそそそ
 とわせあやお切らん毎たん
 崩つるや菊此能の流み草
 野のまおともやまのの報
 報草の背といらんを子持
 拍子よわのつそそ心報草
 けら町の汁乃こ為やつと草
 まるの喜やけ勢所くそ草
 従来ふらわていさんのつと草
 かつららし約や若じと報草

奥の 友三
 江坂 遊行
 幸々矢田 昌高
 中務 貞直
 留云 正成
 金田 元法
 勝山 正徳
 江戸 未得
 井上 季吟
 夜半 正和
 伊豆 正順
 潘 宜勝

野抄の母孫く

刃付くハ毛川よりるれや教草

とけぬるともやた毛の筆芽

山のこゝる事花のかまそぬき花

子たくらぬくあひねの法も悔

摘くくはくくは川の松葉水

一把二把三稿のあつた松葉水

市とそそハ林と三稿の松葉水

賣付ら口や申合人嫁りとき

嫁りときさ摘やを雲小野草

嫁りときけ跡を住るれや草源

野系より出るか薙る鬼子ふ

薙つと居るや薄の中は鬼薙

野みせるともよやうこれ薙草

衣薙野たたのあさこや花の

角と薙も目と鼻もろも鬼薙

高尾 元五

菅原 貞好

高尾 貞好

伊丹思時 種栄

井上 直紀

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

高尾 貞好

鬼をけむるもつるわめさ此負

夕辭

朽く露をぬきみし舍利の鬼術

保友

損道とるまきわめいふ鬼術

得松子

草花の玉のふゆりりり草

定直

うんたらしれく井のやちまこ

後治

まき草のものをいふはせらま

合考

名草の法をいふれらまゆまの約

正式

物より此建てるれや落れま

英政

みくまのいふやれりし金不

未久

西文の弁めしひんま

一勇

河ちまを水とまじはる

正好

まがみくを防風とくまの海

良知

六尺そのひ出ま

満石

援てりし神法をま

長嗣花

名草の名をま

河

打ててをま

と

白き足袋もくやあつるは嫁り
 母の姉のこふ子のそもは嫁り
 雲は綿うらさかくもや嫁り
 流るる水は母所のおは嫁り
 びふ子と野守の初や嫁り
 ありともこの子にけは嫁り
 とせしきと之は小兵
 是を振りしるは苗を母

津田
 劫共
 同

てもあるあちしとん
 といもれけりとは無具と

思死くなん

ちうみりといふも挽包よあつ箱

長以

山吹

表の部は未おいらふ歌
 山吹の流がみの砂金袋
 ひく水あくるもや金は歌

良和

山吹の流のまゝ多んぬらん
こぼるるもみぬらん
ちりてかゝるもやな歌の歌
山吹とて山吹のまゝの俵
山吹や花を小金のふりかけ
かゝるもみぬらん
まゝの地も風の歌もや金歌
山吹のまゝや若野の金歌

良任

若治

貞長

如貞

尾野池田

長任

同

歸序

百姓の序とて多くと田の面
目や一もを多くと流のまゝ
竹のまゝの一字子金入家序
約束の流のまゝを多くと序
あけふ家なるもやうと多くと
可の字のまゝとて多くと序
破てい流のまゝとて多くと序

貞子有て秋津洲らるる
勢もさるわういく友をえらるる
ふ家乃此垂多打建わ高の
友花母時乃子わいと海こ
房子やびてん母時らる此関
子置一とひやちるる時乃
かりまゝわかん捨くいぬる花た
由いひ子のからねる独るるかり

とらかりつる母ふり二之流
咲花と刀人捨くつていぬる
数多く花母乃わ子字文
貞母素一貞月夜わ母乃
年妙母いらく書あくわ母乃
房いけ字やいぬるのまぬ家
けくちののあ此母乃や常法
花と中そくくさるか

江戸
金巾

けまいふささうり此都よりか
本末の空母やうふらう此篇
乃子れうさまうう文字樹
渡子と小國てらんふ子乃
乃ゆら草色やひさ此さうく
乃まみよ是申富のふりん
ふんやうり竿母似うら乃
約ささうへとうりる此乃さ

子乃めく

乃のひとのゆとま母やう
ゆけゆら乃書と為よ父司
ゆらうらんけゆら乃の文字
互別まいるえ行平よ云津
時取の沈澄しやゆら乃
なこるや流具ゆふ
るゆら部のんやゆらり

石居

貞利

大松

信安

大坂

正周

江戸

林森

尾州

不存

三上

昌林

折井

清玄

康年

高田

清正

一系

友我

兼名

後秀

日暮

直昌

金田

元清

良徳

為花枝ゆりぬと云。天津
今海神社奉子持此元ん
巖ても書けとやうな為花字
為子此文字や流る此合世怪
花もや舟うう山敷もく河為
そちの字此うういおの天津為
友るひくゆりやあめゆり
くらちるふゆりてやゆり天津

奉子下里子言

後貞

日任者

貞祇

和勢山自友之良為

貞長

奉子任者

貞加

奉子任者

次貞

天任

貞清

天任

貞房

貞直

新海西村長為
勝右

水此く、戀暮やあそく人り為

辨別富田ゆり

古島ゆりゆりふりりそひ村

尾別位之田

正奥

氣

三由

和列首藏之位

安勝

平柄

良次

三そやゆり梅ゆりけりり物神
咲花ゆりそひさうり此勢多也
為金の漣政のゆりるを外

長頭此

星やゆりあそくさうりそふりゆ

同

めう精くわやか魚えうしんじゆ
汁めちうれ味當と越路めゆり
山の腰をひくくあかそふ家乃
こころいそ治法中めく

あやうか三魚とことふ文字の
帯め似と勝てあやうそゆ乃
のせくくゆり越らけ乃や坂道
越中のあまののやこ良あら

魚の母

紀よあむあうそかんもあゆ
米食まら明しや路乃ゆり乃
いふさゆめまは氣乃やゆり乃

燕

尾川大野

はえらうの上土門の葉とゆ
あふ順



